



「子育ての入り口で」

社会福祉法人 宝山寺福祉事業団

児童発達支援センター 仔鹿園 岡本とも子 氏

何年か前に手をつなぐ育成会の成年期の親たちの勉強会に講師として呼ばれたことがあり、どんな話が良いのか悩んだことがありました。どんな話をしたかはよく覚えていないのですが、会が終わってからひとりのお母さんから言われたことが「先生がしてこられたのは子育ての入り口やな。うちの子は今年50歳を越えるけど未だに子育てしてるわ。私が死んだら子育ては終わりや。今のお母さんたちは幸せやわ。子育ての入り口でちゃんとわかって貰える人がいて、相談できて、それぞれの辛さはあるやろうけど私らの時とは違うから。」おっしゃる通り、私が療育の世界に身を置いたころはサービスなんて数えるほどで私たちは半分「気持ち」で療育していたように思います。何の確信もなく何の療育技術もなく、只々お母さんの負担を少しでも減らしてあげられたら、子どもたちの気持ちに寄り添いながら少しでも何かができるようになればとの想いでした。

ある時には、家族に緊急の状況がありどうしても一晩見て欲しいと言われ、当時主任だった小森先生と朝まで仔鹿園の会議室に布団を敷いて3人で過ごしていたことがありました。

私は療育に関わり40数年になりますが、社会の情勢が変化すると当然のことながら障害者福祉も変化をしてきました。措置の時代から契約の時代へ。また、障害者総合福祉法の改正も繰り返されてきました。

現在、いろいろな形の療育があります。児童福祉法の改正時に児童発達支援と放課後等デイサービスになり、更に児童発達支援センターの役割が示され、仔鹿園も大きく変わる時期になってきたように思います。次の制度および報酬改正では子供に関わるサービスが大きく変わります。国が示す「子ども家庭庁」の創設。勿論、障害者全体に良い方向になるよう働きかけも必要になります。

子育ての入り口のわずかな支援を「療育」と呼び、それを繋げてネットワークを広げ、「手をつなぐ育成会」へとつなげて行きたいと思っています。

これまでの育成会の活動に感謝を致します。そして今後もよろしくお願い致します。